

看護基礎教育における実習用ポートフォリオ導入の試み

梶本 朋子¹, 池原 麗子¹, 影本 妙子¹,
中西 啓子²

Trial Introduction of a Practical Training Portfolio in Basic Nursing Education

Tomoko MASUMOTO¹, Reiko IKEHARA¹, Taeko KAGEMOTO¹
and Keiko NAKANISHI²

キーワード：看護基礎教育，臨地実習，ポートフォリオ，看護学生，導入

概 要

平成25年度入学生に対して実習用ポートフォリオを3年間実践し、その方法および改善点に関して検討したので報告する。1年次4月，3年次4月，3年次11月にそれぞれ無記名による質問紙調査を実施した結果，3年間の実習で成長したことでは【専門職者としての姿勢・態度】と【看護実践能力】があった。しかし実習用ポートフォリオの定期的な記入や確認が十分にはできておらず活用できていない現状も明らかとなった。このことから①実習用ポートフォリオを使用した指導を基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱより開始する，②書き方を学生の理解度に合わせてわかりやすくする，③3年次の各実習の最終日に30分程度記入時間を取るようになる，④担当教員は学生が実習ごとに何を学べたのか，どういった学習の取り組みがよかったのかをその都度評価し伝える，⑤1年次から3年間を通して経時的に使用できるファイル等の工夫を継続して行う，など5項目の改善点を考察した。

1. 緒 言

本学は3年制の短期大学であり，附属の3次救急を担う病院で活躍できる看護学生の教育を目指している。そのため，臨床経験が豊富な教員による講義，実習での教育に力を入れており，リメディアル教育を重視した初年次教育から始まり，3年間で看護師国家資格取得に向けての系統的な教育が行われている。その中で私たち教員は臨地実習での経験後に学生への教育成果を実感することが多い。

特に3年次の領域別臨地実習においては，学生は短期間で知識の補充をしながら看護過程の展開をすることになる。教員は学生に1・2年次で学習した基礎知識や技術から，病態をふまえた現在の患者の病状や治療経過を理解し，それに応じた援助や看護ケアを考え

てほしい，苦痛症状がある患者にも少しでも気持ちよく過ごせるように日常生活の援助を実践してほしいと考えている。また，そうすることで患者との信頼関係が深まり看護の学びが深まる経験ができると考えて指導している。

厚生労働省の「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書¹⁾」では，看護教育の現状と課題を挙げ，看護師免許取得前に学ぶべき教育内容を示し，中でも特に臨地実習に関しては学生の自律的な学習を促進するために，日々の学生の体験及び実践能力の習得状況を確認し，その学生を理解した関わり方をする必要性や学生がどのような対象者に関わり，どのような学びをしたかを，教師と学生双方が共通に認識できるようにするためにポートフォリオなどを活用することが効果的であると報告している。

ポートフォリオとは，「情報の一元化」をするものであり，鈴木²⁾は目標を立てて実践し，それを俯瞰することで自らの成長を可視化し自己管理，自尊感情，自己肯定感に有効であるとしている。ポートフォリオを用いた学習や評価は看護基礎教育の中でも2000年頃より実践され，横山³⁾は授業にポートフォリオを導入

(平成28年11月21日受理)

¹⁾川崎医療短期大学 看護科

²⁾前川崎医療短期大学 看護科

¹⁾Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

²⁾Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Profession (Formerly)

し学習意欲の向上に効果的であったとしている。小林ら⁴⁾は臨地実習にポートフォリオの活用を導入し約6割の学生が充実感を感じポートフォリオが役立ったと成果を示している。また中村ら⁵⁾は看護実践能力の到達度を評価するためにポートフォリオを活用し、学生が自己評価を行う方法としてポートフォリオの有効性を示している。

そこで私たちは平成23年度3年次生より実習での学生への教育効果をより高めるために、学生個々の実習に関する学習をまとめたポートフォリオが効果的であると考へ、別々で行っていた実習に関連する指導や内容を1つのファイルにまとめられるよう実習用ポートフォリオを活用した教育実践を行った。

今回、平成25年度入学生に対して実習用ポートフォリオを導入し、入学時より3年次11月の実習全体のまとめが終わるまで継続して指導実践できた。その活用の現状と問題点、および今後の改善点に関して検討したので報告する。

2. 研究方法

1) 研究対象者

A短期大学看護科に平成25年度入学した学生137名のうち、対象年度に基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ・領域別実習を履修した学生で調査に同意が得られたものを対象とした。

2) 研究期間

平成25年4月から平成27年11月までである。

3) 対象学生の実習状況

対象学生の実習科目、実習期間、および本研究の調査時期を図1に示す。

A短期大学看護科の看護学臨地実習の目的は、「基礎看護学、成人看護学、老年看護学、精神看護学、母性看護学、小児看護学、在宅看護論、看護の統合と実践

で学んだ理論や方法を臨地において体験し、保健医療福祉チームの一員としての看護の役割と責任を理解し、看護の実践に必要な知識・技能・態度を学び、自己の看護観を発展させる」である。

この目的を達成するために学生は机上で看護の基本的要素を学習したうえで、1年次・2年次に専門分野Ⅰの基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱを行う。基礎看護学実習Ⅰでは、講義で学んだ看護の役割機能や専門性が臨地の場で具体化され、機能しているのかを学ぶ。また基礎看護学実習Ⅱでは患者1名を受け持ち、健康障害をもつ患者の日常生活援助を通して看護の基本となる知識・技術・態度を学ぶ。3年次では4月から前述した8領域の実習を全20週間で行い、各領域で受け持ち患者を持ち、看護過程を展開し実践する。

4) 実習用ポートフォリオを活用した教育実践の概要

(1) 実習用ポートフォリオを導入した目的

A短期大学の実習用ポートフォリオは、その活用により1. 自己目標を学生が認識し、それに向かって努力することで実習経過の中で自己成長できる、2. 学生の自律的な学習を促進する、3. 教員は、学生の学習状況を確認し、その学生の状況に合わせた指導を行う、4. 継続的な倫理観および倫理的態度の育成をめざす、の4点を目指している。

(2) 実習用ポートフォリオのファイルに入れるもの

学生が共通してファイルに入れるものとしては①目標シート（基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱの記録、3年次4月の領域実習での目標）、②成長シート（基礎看護学実習Ⅱの記録）、③看護過程演習記録（看護過程論Ⅱ）、④個人向上表（3年次実習中に看護学臨地実習の目的、目標に合わせて学生が記載する記録）、⑤倫理に関する自己評価表（3年次各領域実習後に学生が記載する記録）⑥学習したもの（事前課題、自己学習ノートまたは実習前・中・後に学習したもの）である。それ以外

年次	科目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	基礎看護学実習Ⅰ 1週間	調査 1回目										↔	
2	基礎看護学実習Ⅱ 2週間								↔				
3	領域別看護学 臨地実習 20週間	← 調査 2回目			(夏季休暇2週間を含む)			→		調査 3回目			

(↔実習期間を示す)

図1 3年間の臨地実習科目・期間及び調査時期

に個別に実習の学習に関連するものは何を入れても構わないことを説明した。

(3) 具体的方法

①基礎看護学実習Ⅰ（1年次）

実習オリエンテーションで1年間の学習評価および次年度に向けての目標確認を行った後、看護倫理綱領と個人情報保護の誓約書を署名後にファイルにいった。また、実習終了時に、実習で記入した学習記録の一部をファイルにいった。

②基礎看護学実習Ⅱ（2年次）

実習開始前にオリエンテーションで実習用ポートフォリオとその臨地実習中の活用方法の説明を受けた後、1年次の記録を見直した。実習終了後に実習記録内の目標シート、成長シートをファイルにいった。また、基礎看護学実習Ⅱ終了後に履修する看護過程論Ⅱで行った演習資料と自己学習物をいった。

③領域別実習（3年次）

実習開始前にオリエンテーションで、再度実習用ポートフォリオとその臨地実習中の活用方法の説明を受けた後、1・2年次の目標シートや成長シートを見直した。次に3年次領域実習全体の目標シートの記入を行った。領域実習中は成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ・老年看護学実習の3領域のオリエンテーション時に各自ポートフォリオを教員に提出し、学生教員の両者で確認した。学生は実習中及び実習最終日に担当教員と面接後に「倫理に関する自己評価表」と「個人向上表」を記入した。

④実習まとめ（すべての実習終了後）

学生は各自、自分のポートフォリオを見直して、実習全体を通した学びをA4用紙1枚にまとめた。その後、それらを持ち寄り5～6名のグループで各自の学びを発表した。次に、グループでテーマを決めて実習での学びのグループワークを行った後、それぞれ担当教員の指導を受けて、発表資料B4用紙1枚を作成し全体で発表会を実施した。

実習用ポートフォリオ作成上の注意点として、①個人情報保護のため患者が推測・特定できるような内容のものは入れない、②実際に実習中にまとめたものや使ったものはすぐ入れる、の2点を指導した。

また、ポートフォリオを導入するにあたり全教員にコーチングの手法を文書で提示し依頼を行った。

5) データ収集方法

研究対象者に対して、実習用ポートフォリオの効果および3年間での学生の意識や思考の変化を検討する

ため、入学時の1年次4月、2年次の基礎看護学実習Ⅱの後で領域実習の前である3年次4月、すべての実習が終了した3年次11月に質問紙調査を実施した。質問紙の構成は、①個人的背景②看護職への志望の意志③達成動機であった。その内容としては①個人的背景は年齢、性別、学年、②看護職への志望の意志は、「絶対になりたい」「できればになりたい」「なりたい」「資格が取ればよい」「卒業できれば良い」「あまりなりたくない」「なりたくない」「そのほか」の8項目で尋ねた。また③達成動機は達成動機測定尺度⁶⁾を使用した。加えて3年次11月には、④3年間の実習により成長したことの自由記述、⑤ポートフォリオに関して（3年時の領域実習で定期的に記述しながら行えたか、またできなかったと思う理由はなにか、ポートフォリオを効果的に使うための工夫の自由記述）の2項目を追加した。

6) 調査尺度

(1) 達成動機測定尺度

堀野ら⁷⁾の達成動機測定尺度は「価値ある仕事に挑戦し、それを成し遂げようとする傾向の強さを測定するための尺度」である。その構成は個人としての価値を認めるものを成し遂げようとする「自己充實的達成動機」と社会的・文化的に価値のあることを評価する「競争的達成動機」の2因子の構造を持つ23項目からなる。回答形式は「1. 全然あてはまらない」「2. ほとんどあてはまらない」「3. あまりあてはまらない」「4. どちらともいえない」「5. すこしあてはまる」「6. ほとんどあてはまる」「7. 非常によくあてはまる」の7段階リッカート尺度で回答を求め得点化したものである。

7) 分析方法

質問紙の①②に関しては単純集計を行った。次に③達成動機測定尺度の統計解析にはSPSS 20.0 for windowsを用いた。また、尺度の信頼性に関してはCronbachの α 係数を算出した。分析に関しては、等分散の検定後、一元配置分散分析（ANOVA）を行い、多重比較にはScheffe法を用いた。有意確率は $p < 0.05$ とした。

また④の自由記述に関しては、成長に関するものを抽出し、その内容により類似したものをまとめてカテゴリ化を行い、研究者が命名した。カテゴリ化に関しては研究者間で検討しながら分類した。⑤は単純集計を行い自由記述に関してはすべて抽出しその内容をみた。

8) 倫理的配慮

研究における倫理的配慮として、質問紙は無記名とし、調査時にその都度、口頭及び文書にて研究主旨を説明し同意を得たもののみ配布した。調査時毎に、この調査への協力は自由であること、調査の結果は統計的な処理を行い、個人的に処理することはないこと、回答の秘密は厳守し、研究目的以外には使用しないこと、また成績等に影響しないことを説明した。質問紙の回収に関しては配布後1週間程度の期間を設け、学内に設置した投函箱に投函してもらった。

また、実習用ポートフォリオの導入に関しては所属機関の承認を得て行った。

3. 結果

質問紙の回収率は、1年次4月(平成25年4月)129名(94.1%)、3年次4月(平成27年4月)128名(93.4%)、3年次11月(平成27年11月)113名(82.4%)であり、平均年齢は1年次4月18.29歳、性別は男子学生10名、女子学生118名、無記名1名であった。

1) 看護職への志望の意志

看護職への志望の意志は表1に示した。

1年次4月の看護職への志望の意志は「絶対になりたい」89名(69.0%)、「できればになりたい」12名(9.3%)、「なりたい」が15名(11.6%)であった。次に、3年次4月は「絶対になりたい」52名(40.6%)、「できればになりたい」26名(20.3%)、「なりたい」が29名(22.6%)であった。実習終了後の3年次11月には「絶対な

表1 看護職への志望の意志

n=370

回答	1年次4月 n=129 (%)	3年次4月 n=128 (%)	3年次11月 n=113 (%)
絶対になりたい	89 (69.0)	52 (40.6)	56 (49.6)
できればになりたい	12 (9.3)	26 (20.3)	20 (17.7)
なりたい	15 (11.6)	29 (22.6)	26 (23.0)
あまりなりたくない	0	7 (5.4)	5 (4.4)
なりたくない	2 (1.5)	1 (0.7)	0
資格が取ればよい	10 (7.8)	9 (7.0)	5 (4.4)
卒業できればよい	0	3 (2.3)	1 (0.9)
その他	1 (0.7)	1 (0.7)	0

りたい」56名(49.6%)、「できればになりたい」20名(17.7%)、「なりたい」が26名(23.0%)であった。

2) 達成動機に関して

達成動機測定尺度の結果は表2に示した。

回答のあった学生のうちデータの欠損を除いた有効回答は1年次4月130名中112名(89.1%)、3年次4月128名中118名(92.1%)、3年次11月113名中103名(91.1%)であった。尺度の信頼性に関してCronbachの α 係数は、0.914であった。

自己充實的達成動機は1年次4月71.50 \pm 11.87(得点 \pm 標準偏差)、3年次4月67.61 \pm 9.99、3年次11月68.82 \pm 11.15であり、競争的達成動機は1年次4月47.39 \pm 10.30、3年次4月45.38 \pm 9.40、3年次11月47.82 \pm 9.45であった。自己充實的達成動機が1年次4月と3年次4月の間で有意差(F値3.737)が見られた。

3) 3年間の実習を通して成長したこと

3年間の実習で成長したことは自由記述で行い、まとめを表3に示した。カテゴリを【】、サブカテゴリを〔〕、各学生の記述内容を<>で示した。

成長に関する記述内容は84あり、それらに関連のある内容で分類し、8サブカテゴリに分けた。<忍耐力がついた><あきらめずに取り組んだり、頑張れるようになったところ>などの内容は〔看護師としての態度〕、<自分の欠点がわかった><相手のことを思い行動できたり、自分のできなかったことを振り返り、次につなげようと意欲的になった>などは〔自分自身をコントロールする力〕、<人とかかわるのがもっと好きになった><より人の気持ちやニーズについて考えられるようになった>などは〔他者を尊重する気持ちや調整する力〕、<3年間を通して、看護を学ぶことができた>などは〔看護の学び〕とし、これらを【専門職者としての姿勢・態度】と命名した。また<看護の知識が身についた><毎日勉強しているところ>などの内容は〔学習態度や知識の獲得〕、<人との距離感、接し方><自分の意見をうまく言えるようになった>などは〔コミュニケーション能力の向上〕、<患者さんの立場になって、計画を立てることができた点>などは

表2 達成動機測定尺度の得点

学年・人数 達成動機	a 1年次4月 (n=112) M \pm SD	b 3年次4月 (n=118) M \pm SD	c 3年次11月 (n=103) M \pm SD	F値	
自己充實的達成動機	71.50 \pm 11.87	67.61 \pm 9.99	68.82 \pm 11.15	3.737	ab*
競争的達成動機	47.39 \pm 10.30	45.38 \pm 9.40	47.82 \pm 9.45	2.018	

一元配置分散分析 (scheffeの多重比較) * p<0.05

少数点第3位四捨五入

表3 3年間の臨地実習での成長したこと

n = 84

カテゴリ	サブカテゴリ	コード	数
【専門職者としての姿勢・態度】	〔看護師としての態度〕	＜忍耐力がついた＞＜努力ができる場所＞＜あきらめずに取り組んだり、頑張れるようになったところ＞＜責任感が強くなった＞＜看護師になることへの思いが強くなった＞＜たとえつらくても乗り越えること＞＜くじけそうになっても、乗り越えれば必ず自分の力になるということが実感できたこと＞	17
	〔自分自身をコントロールする力〕	＜自分の性格がわかった＞＜自分の欠点がわかった＞＜相手のことを想い行動できたり、自分のできなかったことを振り返り、次につなげようと意欲的になった＞＜一人で抱え込まずに、誰かに相談したり助けを求めようになった＞＜礼儀や勉強に取り組む姿勢＞＜適応能力があがった＞＜自分の情緒の持ち方、リフレッシュ方法を見つけた＞＜物事の優先順位を考えて取り組むところ＞	16
	〔他者を尊重する気持ちや調整する力〕	＜人とかかわるのがもっと好きになった＞＜より人の気持ちやニーズについて考えられるようになった＞＜患者の立場に立って考えられるようになったところ＞＜周りの人により優しくできるようになった＞＜人に気持ちを考えられるようになった＞＜協調性＞＜人とかかわることの楽しさや考える楽しさを身に付けることができた＞＜傾聴など相手のことを一番に考えてケア・行動すること＞	13
	〔看護の学び〕	＜少し看護師の魅力がわかった＞＜3年間を通して、看護を学ぶことができた＞	2
【看護実践力】	〔学習態度や知識の獲得〕	＜看護の知識が身についた＞＜看護に関する勉強を頑張れたところ＞＜専門的知識が圧倒的に増えた＞＜毎日勉強しているところ＞＜患者さんを受け持たせていただいたことで、疾患についてのつながりがわかるようになった＞	16
	〔コミュニケーション能力の向上〕	＜コミュニケーション能力＞＜コミュニケーションの工夫＞＜人見知りしなくなった＞＜人との距離感、接し方＞＜自分の意見をうまく言えるようになった＞＜自分の意思をもって他の人に伝えるところ＞	14
	〔看護実践能力の向上〕	＜患者さんの立場になって、計画を立てることができた点＞＜患者さんの個性を考慮した看護を考えることができるようになった＞	4
	〔看護技術の向上〕	＜疾患の理解にはまだまだ時間がかかるものの、技術面では向上できたと思う＞	2

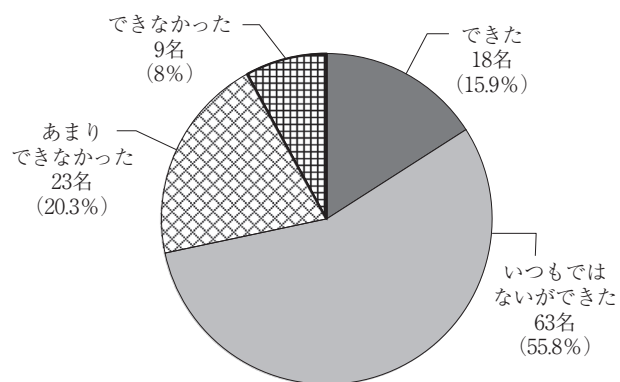
〔看護実践能力の向上〕、＜疾患の理解にはまだまだ時間がかかるものの、技術面では向上できたと思う＞などは〔看護技術の向上〕とし、これらを【看護実践力】と命名した。

4) ポートフォリオに関して

3年次領域実習中のポートフォリオ活用の振り返りに関しては図2に示した。

1年次では、実習期間が1週間と短いためオリエンテーションで配布された実習に関する資料や病院案内などを入れている学生がいた。また、2つ穴リングファイルを使用したこともあり、実習の要項や記録を入れて持ち歩く学生がいたため、実習記録とは別々にするよう指導した。2年次では受け持ち患者などの病態学習時にコピーした資料、3年次ではそれらに加えて関連図を部分的に記載したものなどを入れている学生がおり、活用方法の実際には学生個々に差がみられた。

実習用ポートフォリオの活用に関して、定期的に記入や確認が「できた」が18名（15.9%）、「いつもではないができた」が63名（55.8%）、「あまりできなかった」が23名（20.3%）、「できなかった」が9名（8%）であった。



n = 113

図2 ポートフォリオ活用の振り返り

できなかった理由として「忘れていて、次の領域実習に進んでさらに忘れた」「忙しかった」「時間が足りない」「記録と臨床のことで頭がいっぱいで」があった。

実習用ポートフォリオを活用する工夫について尋ねたところ、「書くのを忘れるので、領域別の最終週にみんなて書いたら忘れない」「先生が必ず面談するようにする」「ほかのメンバーからの評価も取り入れる」「自分を見つめる機会を作る」「先生からの指導や自分の反

省は忘れないうちに記入して、見直す「書き方の見本がわかりにくい」「どの領域でも行うようにする」「ポートフォリオに記入するように、もっと声掛けをしてほしい」などの記述があった。

4. 考 察

1) 看護職への志望の意志に関して

3年間での看護職への志望の意志の変化をみた。看護職に「絶対になりたい」「できればになりたい」「なりたいたい」と答えた学生は1年次4月89.9%、3年次4月83.6%、3年次11月90.3%であった。これは3年間を通して約9割の学生は看護職への志望の意志があり、先行研究⁸⁾と比較しても差はない。また、1年次4月と3年次4月と比較すると、「絶対になりたい」と答えた学生が減っており、「できればになりたい」「なりたいたい」と答えた学生が増えている。これは1年次には看護職へのあこがれが多かったものが、2年次のより専門的な学習のなかで現実の厳しさや自分の能力への不安などが強くなったのではないかと考える。A短期大学看護科は、3年間での医療の専門家を育成することと同時に看護師の資格取得を目指しており、重症で複雑な看護の理解と実践を求められ、看護学生としての自信につながらないことが予測される。その中で看護職への志望の意志が高まるような学生に対しての指導や支援がされていない現状があると考えられる。宮城ら⁹⁾は成人看護実習にポートフォリオを活用する中で、教員間の連携を密にして学生が直面している課題の困惑について共通理解することや、教員の指導内容の統一を図る準備の重要性を述べている。看護職への志望の意志が向上する実習用ポートフォリオの活用を1・2年次より早めに始めて3年間を通して、教員間で統一して実施できるよう検討していく必要がある。

2) 達成動機に関して

個人としての価値を認めるものを成し遂げようとする自己充實的達成動機では、1年次4月に比べ3年次4月で有意に低下した。森田ら¹⁰⁾は「達成動機を高めることは、その動機づけによる行動の結果として課題達成度も高まり、自己成長および自己教育力の育成にとっても有用である。」としている。実際に患者様を受け持つ基礎看護学実習Ⅱの後である3年次4月にそれらが低下したことは、看護職への志望の意志と同様に実際に受け持ちをもって展開する臨地実習を経験し、現実を目の当たりにすることで今の自分とのギャップを感じた結果であることや、基礎看護学実習Ⅱを終え、

領域別臨地実習に進んでいくための動機づけが十分でないことが推測される。また、実習用ポートフォリオの評価として主軸となる3年次の領域実習後は4月時点より数値の上昇は見られるが有意差はない。実習用ポートフォリオの活用のみで達成動機の向上につながることは考えにくいだが、少しでも効果的な活用をするためにはポートフォリオの目的や動機づけは重要な要素と考える。ポートフォリオを活用しながらどのような動機づけを行い、学習効果を高めていくのが今後課題であり、その方法や内容の検討が必要であると考えられる。

3) 3年間の実習を通して成長したこと

学生が自覚している実習での成長した内容をみるために、3年間の実習で成長したことの自由記述を記載してもらった。記述内容をカテゴリ化したところ、【専門職者としての姿勢・態度】と【看護実践力】があった。その内容から実習中に学生は、3年間の〔看護の学び〕から〔看護師としての態度〕がどうあるべきかを考え、長期の実習の中で〔自分自身をコントロールする力〕をもとに、患者とのかかわりの中で〔他者を尊重する気持ちや調整する力〕を身につけたと感じ、【専門職者としての姿勢・態度】を獲得している。また、継続した学習の中で〔学習態度や知識の獲得〕を行い、毎日の看護師や患者との関わりから〔コミュニケーション能力の向上〕を得て、【看護実践力】が成長したと考える。

【専門職者としての姿勢・態度】があったことは、社会人基礎力とも共通しているが、本学実習の目標である人間関係を築くプロセスや、医療従事者としての倫理観を習得できたことを示している。これは実習用ポートフォリオの目的とも共通していることから、学生は臨地実習の中で学び成長しているといえる。しかし、これらの内容は、ポートフォリオ使用前後で明確な相違があるわけではなく、学生が個々に実習用ポートフォリオを活用した結果であるという評価にはつながらない。野崎ら¹¹⁾はポートフォリオにより学習が起ることに意味があるとし、「効果的に支援するためには、学習成果の測定によって可視化し、学習成果をもたらした学習過程の確認することから始める。」としている。そのためには個々の学生が実習用ポートフォリオを、学習を進める学習手法と捉え、さらに各領域の教員は、学生が実習ごとに何を学べたのか、どのような学習の取り組みがよかったのかをその都度評価していくことが必要となると考える。

4) 実習用ポートフォリオに関して

①定期的な記入および振り返り時間の確保に関して

実習用ポートフォリオに定期的に記入や確認が「できた」「いつもではないができた」と答えた学生は71.7%であり、「あまりできなかった」「できなかった」と答えた学生は28.3%であった。できなかった理由としては、「忘れていて、次の領域実習に進んでさらに忘れた」「忙しかった」「時間が足りない」「記録と臨床のことで頭がいっぱいで」などの記述があった。1・2年次の基礎看護学実習での学びは、次の実習開始前に振り返る時間を設けているが、3年次では実習が長期にわたることからポートフォリオの効果的な活用の維持ができていないことを示している。臨地実習中、振り返る時間はあまりとれておらず、学習した記録物をファイルに入れてはいるが、その意味を考えることができず実習やまとめが終了してしまう学生がいることが推測できる。また、領域実習が始まると事前学習や事後学習、日々の記録におわれ、客観的に考える時間を持ちにくい。「忘れていて」とあるように「個人向上表」などに関しても時間がなく仕方なく書くが、具体的な記述が書けず適切な指導を受けられていない現状があると考えられる。

領域実習開始前のオリエンテーション時には、時間をとって基礎看護実習中に書いた実習記録の一部である目標シートや自己成長シートを返却して振り返りをさせている。しかし、基礎看護実習からは時間がかなり経過しており、効果が薄れていることも考えられ、このことが実習用ポートフォリオの目的や目標の意識づけができていない要因のひとつとも考えられる。以上のことから基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱの後でも、一度振り返りの時間をとり、学生の目標が達成できたのか、反省点はどのような事か、次の実習で生かせるところはどこかなどについて考える時間をとる必要があると考える。

②ポートフォリオの内容に関して

A短期大学の2年次は、1年次の一般教養科目や人体の構造・機能など専門基礎科目の講義に続き、疾患の治療や看護の専門科目になる。受け持ち患者を持つ実習は2年次の後半にあり、次の3年次の領域実習開始までに教員は各領域で、知識不足を補い良い看護が学べるように課題を提示している。これらの指示された学習物も含めて実習用ポートフォリオは、3年間のそれぞれの実習での学びの中で記述したものを入れることで、前の実習成果を踏まえて次の実習へ継続する

役目をはたすことはできていたと考える。学生の中には定期的にきちんとポートフォリオを見直ししながら、自分が学んだ内容をノートやルーズリーフにまとめて入れている学生が多かった。その一方で、実習用ポートフォリオの目的が理解できず、学習成果物を入れてはいるが見直しなどはしていない学生や実習で学んだ内容を明らかにできず、再度見直しをさせる必要のある学生もおり、実習での個別の面接や指導にかなり時間を必要とした。舟島他¹²⁾は、看護学実習中の学習活動の特徴として目標達成のために必要な学習資源を蓄えたり、活用したりして学ぶことを挙げて、教員が学生の実習の進行中にどのような学習資源を蓄え、それを効果的に活用できているのかを理解する必要性があると述べている。今回実習用ポートフォリオの使用ができていたことは確認したが、これを学びに深めていくためには講義で学習した内容を省察しながら実習し、その学習過程をリフレクションできることが必要であり、また教員がそこに効果的に介入することが重要であるといえる。

加えて、現在は3年次の成人看護学実習Ⅰ、Ⅱ、老年看護学実習で初回面接、中間面接、最終面接を行い個人的に介入し、評価しながら進めているが、学生が自らポートフォリオの有効性を理解し実践するためには、1・2年次に実施する基礎看護学実習Ⅰ、Ⅱで早期に始めるほうが効果的であると考えられる。

調査では見本がわかりにくい、書く意味がわからないなどの回答もあったため、学生に配布する説明資料等を分かりやすいものに検討修正し、教員の面接方法も統一し効果的にかかわる必要がある。

5) 実習用ポートフォリオ活用に向けて

実習は多領域の多病棟で行われており、受け持つ患者も多様であることが現実である。また、教員も全領域で非常勤教員を含めて25名（平成28年4月現在）で指導を担っており、指導内容の統一が困難な状況である。厚生労働省の指針にある通り学生は短期間で病棟に慣れ、また看護過程の展開をしなければならない。小島¹³⁾は看護教育におけるポートフォリオ評価活用の現状では、目標達成に向けて効果的にポートフォリオを作成するには、指導者と学習者がともに目的・効果を正しく理解し、目標達成のために自らの動機づけを持てることや他者からのフィードバックを適切なタイミングで受けられる環境を作り、目標達成に向けてのモチベーションが保てるような援助が得られることが必須条件であるとしている。

実習用ポートフォリオを導入するにあたり全教員に活用等を文書で依頼したが、領域によっては2週間の短期間で多人数の学生の学習活動を個人的に評価し面接を行うことは非常に困難で、すべての領域で面接等を行ってほしいという学生の要望に応えることは現在の状況では難しいと考える。しかし、個別では難しい場合でも教員から学生へ実習グループでのオリエンテーションや学内まとめでの活用強化の意識づけと希望者には個別で面接を行うなど、工夫した実践を依頼したい。

以上の結果から以下の改善点を検討した。

- (1) 実習用ポートフォリオを使用した指導を1・2年次の基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱで早めに開始する。また、その動機づけを明確にする時間をとる。
- (2) 目標シートおよび個人向上表など書き方の見本を、学生の理解度に合わせてわかりやすくする。
- (3) 3年次の各実習の最終日に30分程度記入時間を取るよう各教員に依頼する。また、定期的に学生に記入を指示する。
- (4) 担当教員へのポートフォリオを使用した指導内容として学生が実習ごとに何を学べたのか、どういった学習の取り組みがよかったのかをその都度評価し、学生に伝える。
- (5) 1年次から3年間を通して経時的に使用できるファイルや記録の工夫を、全領域で今後も継続して行う。

入院期間の短縮化に伴い、学生が臨地実習でゆっくり患者と向き合い考える時間は少なくなっている。そのような中で教員は卒業までの到達目標に達することができるよう支援・指導していく必要がある。また、本学での実習用ポートフォリオは継続した倫理観の育成も目標にしている。今回はそれに関する調査は実施していないが、今後も教員・学生が実習用ポートフォリオの目的を十分理解したうえで、より効果的な活用ができるよう進めていきたい。

5. 謝 辞

今回の実習用ポートフォリオの導入に関して、調査に快く協力していただきました学生の方々、教育実践

に賛同し協力して下さった実習担当教員の方々に感謝いたします。

6. 引用文献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書，平成23年2月28日，<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y.html>。
- 2) 鈴木敏恵：看護師の実践力と課題解決力を実現する！ポートフォリオとプロジェクト学習，東京：医学書院，pp.14—41，2010。
- 3) 中村博文，服部紀子，渡部節子，塚越みどり，臺 有桂，林さとみ，金嶋祐加，井上 聡，廣瀬幸美，叶谷由佳：ポートフォリオから見た看護学士課程4年生における看護実践能力の到達度の状況，横浜看護学雑誌7(1)：33—39，2014。
- 4) 小林たつ子，吉田文子，河野由乃，簗持知恵子，中橋淳子，大久保ひろ子，清水恵子，村松照美，萩原結花，松下由美子：臨地実習にポートフォリオの導入を試みた成果と今後の課題，看護教育研究学会誌1(1)：57—58，2009。
- 5) 横山弘美，藪田素子：授業におけるポートフォリオの導入—学生の自己教育力の変化と感想からみた学習意欲の変化—，中国四国地区国立病院附属看護学校紀要1：52—63，2005。
- 6) 堀野 緑：達成動機の構成因子の分析—達成動機の概念の再検討—，教育心理学研究35(2)：148—154，1987。
- 7) 堀野 緑，森 和代：抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因，教育心理学研究39(3)：308—315，1991。
- 8) 榎本朋子，田邊美津子：看護学生の入学動機と自己教育力との関連，川崎医療短期大学紀要32：7—13，2012。
- 9) 宮城和美：ポートフォリオを用いた実習指導における教員の振り返り—教員への語りを分析しての考察—，共創福祉10(2)：29—40，2015。
- 10) 森田敏子，松永保子，内海 滉：看護大学生の達成動機に関する研究—因子構造とその因子を規定する要因の検討：3学年の比較から—，福井医科大学研究雑誌1(1)：97—111，2000。
- 11) 野崎真奈美：アクティブラーニングの特徴と使い方のコツ，「計画・実施・評価を循環させる授業設計—看護教育における講義・演習・実習のつくり方—」野崎真奈美，水戸優子，渡辺かつみ：東京：医学書院，pp.111—112，2016。
- 12) 舟島なをみ：看護学教育における授業展開—質の高い講義・演習・実習の実現に向けて—，東京：医学書院，pp.179，2013。
- 13) 小島さやか：文献から見た看護教育におけるポートフォリオ評価活用の現状，新潟青陵学会誌4(3)：101—109，2012。